♪春を聴こう♪

低・中・高学年向け

春は、今も昔も、世界中の人々が待ち望むおだやかな季節ですね。作曲家たちはそれぞれの国で春の訪れを喜び、音楽にしてきました。今日は、みなさんにぜひ聴いてほしい何曲かを紹介します。

①　「春の声」　作曲：ヨハン・シュトラウス（オーストリア）

春の訪れを喜び、あたたかな日差しの中を軽やかな足取りで踊っているようなワルツのリズムに思わず笑顔になってしまいます。ヨーロッパの冬は日照時間が短くて暗く、そんな数カ月を過ごした人々にとって春は本当に特別な季節なのです。オーケストラの演奏に独唱がついています。

オーケストラの豊かな響きと、美しい歌声を味わって聴いてみてください。おすすめの歌手はキャスリーン・バトル（Kathleen Battle）アメリカの歌手です。カラヤン指揮のウィーンフィルとともに歌っています。

②　ヴァイオリン協奏曲『和音と創意の試み』より第１番「春」　作曲：ヴィヴァルディ（イタリア）

バロック時代（1600～1700 年代くらい）の作曲家、ヴィヴァルディによる作品です。この協奏曲は「春」「夏」「秋」「冬」の４曲で構成され、合わせて『四季』と呼ばれています。協奏曲というのは、独奏部分（ソロ）を担当する楽器（ここではヴァイオリンがソリストとなって小鳥の役をしています。）と伴奏を担当する楽器で構成される音楽のことです。

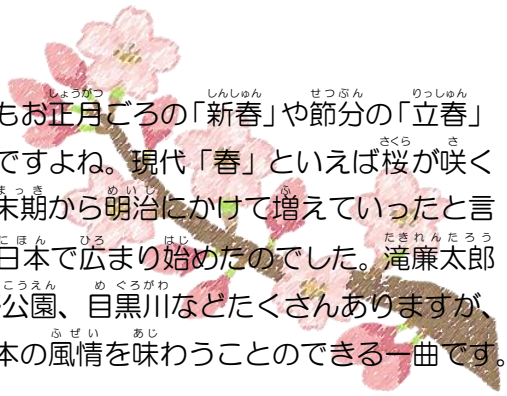
この曲は「ソネット」と呼ばれる短い詩をもとに曲がつけられています。曲中には、おだやかな日の光や小鳥の歌声が描かれ、時には雷が鳴り響いて春の嵐がやってくることも！次々と変化していく春の様子を想像しながら聴いてみてくださいね。

③　無言歌集第5集第6番「春の歌」　作曲：メンデルスゾーン（ドイツ）

実はこの曲は「春の歌のように」演奏しなさいという指示が書かれているだけで、メンデルスゾーン自身が「春の歌」の名付けたわけではありません。それが次第に歴史の中でプロ・アマ問わず様々な人々によって演奏されるうちに題名になっていったのです。楽器で演奏される「言葉のない歌」という意味を込めてこの曲集は「無言歌」と名付けられました。音楽の起源は歌です。演奏する人の心に歌がなければ楽器はどうやって歌えば良いのかわかりません。いつも心の中に歌をもって、楽器に体中の歌を伝えて演奏することはとても大切だと思います。

④　ヴァイオリンソナタ第5番ヘ長調「春」　作曲：ベートーヴェン（ドイツ）

おだやかで幸せな気持ちがあふれるような旋律で始まります。ヴァイオリンとピアノの掛け合いにも注目です。曲が進むにつれ、おだやかさや暖かさだけではない春の姿が描かれているように感じます。情景を想像しながら聴いてみてください。この曲が作曲されたのは 1800 年頃で、ベートーヴェンの聴力はこのころにはかなり失われていたと思われます。音楽家としての人生に悩みながらも、心にわき上がる音楽に力をもらい、生きる希望を見出すのです。そんなベートーヴェンは今年、生誕250周年を迎えます。



⑤　歌曲組曲『四季』より「花」　作曲：滝 廉太郎（日本）

日本の「春」も紹介したいと思います。日本では、「春」と一言で言ってもお正月ごろの「新春」や節分の「立春」など、様々な言葉があります。新春や立春の頃は体感的にはまだまだ冬ですよね。現代「春」といえば桜が咲く４月ごろを思い浮かべる人が多いと思いますが、桜の歴史は浅く、江戸末期から明治にかけて増えていったと言われています。桜並木が各地で見られるようになったころ、西洋音楽も日本で広まり始めたのでした。滝廉太郎の「花」は桜のことを指しています。桜の名所と言えば隅田公園や上野公園、目黒川などたくさんありますが、この曲では隅田川の様子が描かれています。昔も今も変わらぬ美しい日本の風情を味わうことのできる一曲です。